2011 年度　社会学部優秀論文賞（安田賞）講評

選考委員代表　荻　野　昌　弘

2011 年度より、社会学部優秀論文賞（安田賞）の選考方法が改正された。主な変更点は、2010 年度までは、推薦された候補論文はすべて、最優秀論文、優秀論文、佳作いずれかのカテゴリーで表彰されたが、本年度より、佳作がなくなり、原則として、最優秀論文（1 篇）、優秀論文（2 篇程度）を選考することになったことである。

本年度、推薦された論文は 6 篇あり、各論文とも専門に応じて 2 名の選考委員および委員代表の 3 名が、主に、①問題設定の着眼点、独創性、②新たな発見、資料による裏付け、説得力のある論述、③資料収集の努力、資料としての学術的価値の三点から、査読を行った。その結果、最優秀論文 2 篇、優秀論文 1 篇が選ばれた。最優秀論文賞の二篇は、それぞれ異なる点で高く評価でき、甲乙つけがたい論文であるということで、選考委員会は、全会一致で、二篇を最優秀論文賞とした。

三阪夕芽子さんの「サハラ砂漠以南アフリカのキリスト教－ペンテコステ派の興隆－」は、なぜケニアでキリスト教ペンテコステ派信者が増えているのかについて、現地での調査も行いながら考察した論文である。英文の先行研究を踏まえ、グローバリゼーションが進むなかにおけるアフリカ社会の変動を社会学的に捉えようとした、フロンティア精神に富んだ論文である。

また、那須くららさんの「『困窮島』という神話－愛媛県二神島／由利島の事例－」は、民俗学の知見である「困窮島」、すなわち生存のために移民せざるをえなかった人々が移り住んだ離島に関する説が実は神話にすぎず、それは積極的な開発のための植民であったということを、丹念なフィールドワークによって実証した着実かつ独創的な論文である。

三阪論文は新たな研究領域の開拓、那須論文は既存の学説への挑戦と、それぞれ学術的志向は異なるが、いずれも、関学社会学部の卒業論文として高くできるものであることは疑いの余地がない。単に模範的な卒業論文というだけではなく、学術的議論を生み出す知的刺激に満ちた作品になっている点で、学生だけではなく、研究者にとっても興味深い論文である。

最優秀論文賞	卒　業　論　文　名
三阪　夕芽子 （荻野昌弘ゼミ）	サハラ砂漠以南アフリカのキリスト教　－ペンテコステ派の興隆－
那須　くらら （島村恭則ゼミ）	「困窮島」という神話　－愛媛県二神島／由利島の事例－

優秀論文賞	卒　業　論　文　名
三田　英信 （宮原浩二郎ゼミ）	ジンメルのいう社交　－異質性／同質性の対立と形式の自己目的化－